

『就実論叢』第48号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2019年2月28日 発行

# 日本語における形容詞の語形とその作り方をめぐって

## －日本語教師のための日本語文法をもとめて－

On Inflection Forms of the adjective in Japanese

中	崎	崇
城	田	俊

# 日本語における形容詞の語形とその作り方をめぐって

－日本語教師のための日本語文法をもとめて－

On Inflection Forms of the adjective in Japanese

中 崎 崇 (表現文化学科)

NAKAZAKI Takashi

城 田 俊 (獨協大学)

SHIROTA Shun

キーワード：日本語文法、形容詞、イ形容詞、語形、語形変化、活用

## 0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿は、中崎・城田(2017a)(2017b)(2018a)(2018b)に引き続き、日本語教育<sup>1</sup>のための新しい日本語文法教科書の作成を目指して、形容詞は、形態的特徴からみていかなる種類があるのか、単語として文中においてどのようなかたちをもち、どのような意味をもって、どのようにつくられるのかといったことについて検討するものである。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。

## 1. イ形容詞とナ形容詞

形容詞とは、「熱い」「痛い」などが表す「状態」や「赤い」「高い」などが表す「属性」といった語彙的意味<sup>2</sup>を表し、「赤い靴」「高い山」のように名詞を修飾限定したり（連体修飾語となり）、「お腹が痛い」「富士山は高い」のように述語となったり、「ひざが赤く腫れる」「犬が高く跳ぶ」のように動詞述語を修飾限定したり（連用修飾語となり）といった文論的な働きをもつ単語類である。また動詞のような「食べる－食べられる」ヴォイス（態）、「食べる－食べている」といったアスペクト（相）といった形態論的なカテゴリーをもたないといった特徴を有している。

こういった単語類は、述語や連体修飾語となる際に「熱い」「痛い」「赤い」「高い」のように語尾がイとなる。

上記の形容詞と同様に、状態（「静かな」）や属性（「まじめな」）を表し、連体修飾語（「静かな教室」「まじめな学生」）、述語（「教室は静かだ」「太郎はまじめだ」）、連用修飾語（「静かに眠る」「まじめに勉強する」）となり、ヴォイスやアスペクトといった形態論的なカテゴリーをもたない単語類がある。こういった単語類は、述語や連体修飾語となる際に「静かな」

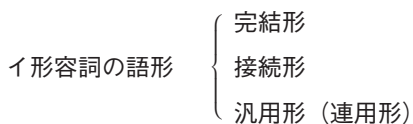
「まじめな」のように語尾がナとなる。こういった単語類は、国文法や国語教育において形容動詞と呼ばれるものであるが、形容詞と共通の語彙的意味、構文論的な働き、形態論的なカテゴリーを有するため形容詞に含める立場がある。日本語教育の世界でみられる立場であるが、この場合「痛い」のような形容詞がイ形容詞、「静かな」のような形容詞がナ形容詞と呼ばれる（鈴木（1972）などではイ形容詞を第一形容詞、ナ形容詞を第二形容詞と呼ぶ）。

ナ形容詞（第二形容詞）を形容詞に含めない立場もある。この立場は、文法的な形の作り方において、ナ形容詞と名詞との共通性を重視する立場である。具体的には、「静かな」といったナ形容詞が、名詞が「桜+だ」「桜+で」「桜+だろう」のように「名詞+判定詞」と2語に分離できるのと同様に、「静か+だ」「静か+で」「静か+だろう」のように分離できるとし、「静か」のような形容動詞語幹と呼ばれるものを「状名詞」と呼び、名詞の下位類とする渡辺（1971）のような立場である。ただ名詞が「鳥が桜にとまる」のように二格をとる場合、述語の補充成分（この場合、くつつく対象）となることが基本であるのに対し、ナ形容詞が同様の外形である「静かに」となる場合、「静かに眠る」のように述語が表す動きの様態を表すように修飾成分となることが基本であり、両者の述語への係りかたは異なる。

本稿では、ナ形容詞がイ形容詞と同様の構文論的な働き、語形形成力を持つことを重視し、ナ形容詞も形容詞に含める立場をとる。ただし、本稿ではイ形容詞の語形とそのつくり方のみを扱うこととする。

## 2. 形容詞の語尾変化

イ形容詞は、動詞と同じく samui「寒い」、samukatta「寒かった」、samukaroo「寒かろう」、samukute「寒くて」のように語尾変化を行う。形容詞も動詞同様、語尾変化によって形成される語形のおおわくは、文の中での働き（文の終わりに使われるか、文の途中で使われるか）で、samuiのようなⅠ「完結形」と呼ぶものと samukuteのようなⅡ「接続形」と呼ぶものの2つに大別される。Ⅰの「完結形」は、言い切ることができ、単独で完結している語形である。Ⅱの「接続形」は、そのかたちで文を、通常、終結することができず、続ける語形である。さらに、文法上の用法が特定されておらず（特定の用法をもたない語形、つまり不特定な語形）、非常に広汎な機能を持ち、日本語の形容詞の「原形」とも目されるかたちであるⅢ「汎用形」（連用形と伝統的に呼ばれる語形）がある。



## 2. 1. 完結形

イ形容詞では、動詞と異なり、単独で完結しうる語形である「完結形」は、「呼び掛け」といった話し手の伝達的な態度・話す目的を表す語形を持たない（語形がないのではなく、そのような意味を形容詞は表し得ない）。「叙述形」のみを有する。samui「寒い」のような単に叙述する（述べ立てる）だけのかたちが1）「叙述形」である。samukaroo「寒かろう」のような、動詞の「呼び掛け形（ヨウ形）」にかたちの上で対応する形態があるが、意志・勧誘の意味とはなり得ず、つくり得るとしたら推量の意味だけとなる。

形容詞の「叙述形」は、【テンス（時制）】（文が表す出来事の発話時との時間的な前後関係を表し分け）により、samui「寒い」のような①「非過去形（イ形）」と samukatta「寒かった」のような②「非過去形（カッタ形）」とに分かたれる。それぞれの語形が表すテンス的意味は、動詞とは異なる。動詞が主に「動き」といった動的事態を描くのに対して、イ形容詞は「状態」「属性」といった静的事態を描くといった異なりがある。イ形容詞の①「非過去形（イ形）」は、「夕日が赤い」「さみしい」のような「状態」を表すイ形容詞であれば、現在の状態を表し、「明日は寒い」のような未来を表す時の成分と共に起すると未来に実現する状態を表す。また「富士山は高い」のような「属性」を表す場合は、その「属性」が発話時において成り立つことを表す。しかし、「属性」といった事態は特定の時間に位置づけられない事態であるため、「非過去形（イ形）」はこの場合その「属性」の成立が発話時に限定されたものであるといった意味を表さない（非過去－過去といった通常のテンス的対立を表さない）。

②「過去形（カッタ形）」は、「夕日が赤かった」「さみしかった」のような「状態」を表すイ形容詞であれば、過去のある特定の時間に顕在的に存在した状態を表す。「富士山は高かった」のような「属性」を表す場合は、その「属性」が過去の時間帯に限定されたものであることを表さない。仁田（2016a）は、このような「属性」の過去形は「そのような属性に対する話し手の認識・発見が過去にあった」ということを表しているとしている。<sup>3</sup>

I. 完結形 —— 1) 叙述形 { ①過去形（イ形）  
②非過去形（カッタ形）

## 2. 2. 接続形

そのかたちで文を、通常、終結することができず、続ける語形である「接続形」については、イ形容詞も動詞と同様に、2.「連体接続形」と3.「連用接続形」に分かたれる。「連体接続形」（略して「連体形」と呼ぶ<sup>4</sup>）は名詞に接続し、「連用接続形」（そのまま「連用接続形」と呼ぶ）は、基本的に名詞以外のものに接続するかたちである。

Ⅱ. 接続形 { 2) 連体接続形 (連体形)  
3) 連用接続形

この接続形は、さらに文中での働き (いわゆる統合的 syntagmatic な意味・機能) によっていくつかの形に分けられる。

「連体形」については、動詞では、主節が表すとき (主節時) を基準として、動詞が表す事柄の継起順序を表し分ける【順序】といった文法的意味を表し分ける語形が存する。主節があらわすときよりも同時か後といったときを表す kaku「書く」といった「非以前形」と主節時よりも先であるといったときを表す kaita「書いた」といった「以前形」である。動詞では「以前形」は「叙述形」の「過去形」と、「非以前形」は「非過去形」と、語形とその作り方は同じである。

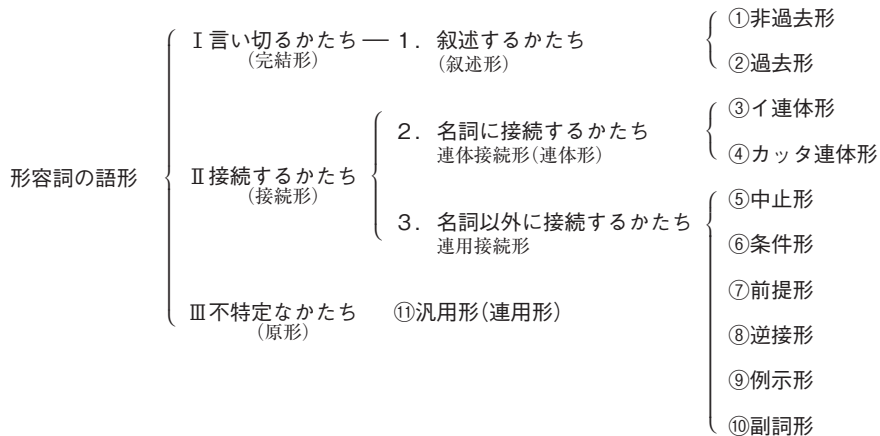
イ形容詞においても名詞に接続する際、動詞と同様に「優しい父親」のような「叙述形」の非過去形 (イ形) と「優しくった父親」のような「叙述形」の過去形 (カッタ形) と同じ作り方をする2種が認められる。6. で詳しく述べるが、この場合、それぞれの語形は【順序】といった文法的意味を表し分けているわけでない。よって本稿では2)「連体形接続 (連体形)」において、動詞と同様の【順序】といった文法的意味を表し分ける「非以前形」と「以前形」の2種をひとまず認めないが、便宜的に③非過去形と同形の連体形を③「イ連体形」と過去形と同形の連体形を④「カッタ連体形」と呼称し語形上の区別はしておく。

次に「連用接続形」については、動詞と同様の語形が認められる。文を途中でとめる (従属節の述語となるなど) かたちである⑤中止形 (クテ形)、後ろにつづく事態 (主節でしめされる事態) が成り立つための条件をあらわすかたちである⑥条件形 (ケレバ形)、当該の事態が、主節の事態の成立の前提となる事態であることをしめす (当該の事態の成立後に、主節の事態が成り立つことをしめす) かたちである⑦前提形 (カッタラ形)、当該の事態が、主節の事態の成立の条件となりえないことをあらわすかたちである⑧逆接形 (クタッテ形)、いくつかの選択肢の中から任意に選んだ事例であることをしめすかたちである⑨例示形 (カッタリ形)、さらに動詞にはみられない動詞・形容詞・副詞を修飾するかたちである⑩副詞形、以上の6つが接続形のかたちである。

以下に、接続形の例文を示しておく。

- (1) 外は寒くて、雪も降っている。(中止形)
- (2) 明日暖かければ、散歩に出かけます。(条件形)
- (3) 値段が安かったら、2つ買います。(前提形)
- (4) おいしくたって、値段が高ければ注文できない。(逆接形)
- (5) ここ数日は、暑かったり、寒かったりした。(例示形)

(6) 着物を美しく着こなす。(副詞形)



### 3. イ形容詞の各語尾形の作り方

イ形容詞は、英語などの形容詞が「Black is beautiful.」のように be 動詞の助けを借りてはじめて述語となるのとは異なり、述語化詞「ダ」の助けを借りずにそのまま述語になることができる。この点は単独で述語となれる動詞と似ている。

動詞と著しく異なるのは、kakoo「書こう」のような話し手の意志的なことがらを述べたり、話し手とともにことがらの実現をはたらきかけたりするかたちである呼び掛け形を持たないことである（「熱かろう」「痛かろう」のようなカロウ形は、意志や勧誘の意味を表さず、ただ推量を示す意味となる）。

イ形容詞の語幹は、単語末のイをとったかたち（「怖い」kowa-i、「寒い」samu-i）である（この語幹は「コワ!」「サム!」など、話し手の感覚や感情の表出に用いられることがある）。イ形容詞の語尾形も動詞と同様に語幹に語尾助辞をつけることで形成されるが、イ形容詞はすべての語幹が母音で終わるため、動詞のように子音語幹動詞、母音語幹動詞といった区別がなく、形容詞の種類に応じた語尾助辞をつけるといったことがない。

以下、イ形容詞の語形とつくり形について、語形ごとにみていくことにする。

#### 3.1. 非過去形（辞書形・イ形）・連体接続形（イ連体形）

非過去形（イ形）は、語幹に -i をつけ形成される。

(7) 赤い aka-i 丸い maru-i うれしい uresi-i

熱い atu-i 痛い ita-i 寒イ samu-i

名詞に接続するかたちである連体形についても同じ語形でその作り方も同じである。2.2.

で述べたように動詞と異なりイ形容詞のイ連体形は、【順序】といった文法的意味の表し分け<sup>5</sup>をするわけではない。

(8) 注射する人は、ここで問診票を書いた。(非以前形)

(9) 赤い靴は、太郎が昨日買った。(イ連体形)

(8) の動詞の非以前形「注射する」は、従属節の事柄（注射をする）がなりたつのは、主節時（問診票を書くといった事柄がなりたつとき）よりも後（この場合は書いた後）であることを表す。しかし、(9) の連体形「赤い」は、主節時との前後関係を表すことはなく（発話時との前後関係も表さず）、単に靴に赤いといった属性を付与し、靴を限定しているにすぎない。

### 3. 2. 過去形（カッタ形）・連体接続形（カッタ連体形）

過去形（カッタ形）は、語幹に -katta をつけ形成される。

(10) 赤カッタ aka-katta    丸カッタ maru-katta    うれしカッタ uresi-katta  
熱カッタ atu-katta    痛カッタ ita-katta    寒カッタ samu-katta

このカッタ -katta のカッ-kat は、イ形容詞の語幹に、過去形をつくるタ ta を接合させるために出現する結合要素（語幹と助辞を結合させる要素）と考える。

過去形をつくる語尾助辞 -ta は、tabe-ru「食べる」のような母音語幹動詞（Ⅱグループ）であれば語幹にそのまま結びつき、kas-u「貸す」のような子音語幹動詞（Ⅰグループ）であれば結合要素 i を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である -kat を介して語尾助辞 -ta に結びつくということである。

名詞に接続するかたちであるカッタ連体形についても同じ語形でその作り方も同じである。カッタ連体形もイ連体形と同じく【順序】といった文法的意味の表し分けをするわけではない。

(11) 注射した人は、ここで止血用のガーゼをもらってください。(以前形)

(12) 優しかった父は、いつもお土産を買ってきてくれた。(カッタ連体形)

(11) の動詞の以前形「注射した」は、従属節の事柄（注射をする）がなりたつのは、主節時（止血用のガーゼをもらうといった事柄がなりたつとき）よりも前（この場合もらう前）であることを表す。しかし、(12) の連体形「優しかった」は、主節時との前後関係を表すことはなく（父が過去の時間帯に限定して優しいといった属性を有していたことを表さない

ため、発話時との前後関係も表さず)、単に父にやさしいといった属性を付与しているのみである。イ連体形との異なりは、カット連体形の場合、属性の持ち主(父)がそのような属性を有していると話し手が認識・発見したのが過去であったということ表しているという点であろう。

### 3.3. 中止形(クテ形)

中止形(クテ形)は、語幹にクテ *-kute* をつける。

- (13) 赤クテ *aka-kute*    丸クテ *maru-kute*    うれしクテ *uresi-kute*  
 熱クテ *atu-kute*    痛クテ *ita-kute*    寒クテ *samu-kute*

クテ *-kute* のク *-ku* も、過去形の *-kat* と同様に、形容詞の語幹に中止形をつくるテ *te* を接合させるために出現する結合要素である。中止形をつくる語尾助辞 *-te* は、*tabe-ru* 「食べる」のような母音語幹動詞(Ⅱグループ)であれば語幹にそのまま結びつき、*kas-u* 「貸す」のような子音語幹動詞(Ⅰグループ)であれば結合要素 *i* を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である *-ku* を介して語尾助辞 *-te* に結びつく。

動詞の中止形の用法には「髪をふりみだして走る」のような様態、「歯を磨いて、顔を洗って、出かけた」のような継起、「風邪をひいて、学校を休んだ」のような因果、「飲んで、歌って、騒いで」のような並列などさまざまあるが、イ形容詞の中止形(クテ形)の用法は動詞と比べると少ない。「彼女の髪は黒くて、美しかった」のような並列、「あまりにおいしくて、食べ過ぎた」のような因果などが確認される。

### 3.4. 条件形(ケレバ形)

条件形(ケレバ形)は、語幹にケレバ *kereba* をつける。

- (14) 赤ケレバ *aka-kereba*                      丸ケレバ *maru-kereba*  
 うれしケレバ *uresi-kereba*                  熱ケレバ *atu-kereba*  
 痛ケレバ *ita-kereba*                          寒ケレバ *samu-kereba*

ケレバ *kereba* のケ *-ker* も、過去形の *-kat*、中止形の *-ku* と同様に、形容詞の語幹に条件形をつくるバ *eba* を接合させるために出現する結合要素である。条件形をつくる語尾助辞 *-eba* は、*kas-u* 「貸す」のような子音語幹動詞(Ⅰグループ)であれば語幹にそのまま結びつき、*tabe-ru* 「食べる」のような母音語幹動詞(Ⅱグループ)であれば結合要素 *r* を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である *-ker* を介して語尾助辞 *-eba* に結びつく。



### 3.5. 前提形（カッタラ形）

前提形（カッタラ形）は、語幹にカッタラ kattara をつける。

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| (15) 赤カッタラ aka-kattara | 丸カッタラ maru-kattara |
| うれしカッタラ uresi-kattara  | 熱カッタラ atu-kattara  |
| 痛カッタラ ita-kattara      | 寒カッタラ samu-kattara |

カッタラ kattara のカッ-kat は、過去形の -kat と同じ、前提形をつくるタラ tara を接合させるために出現する結合要素である。前提形をつくる語尾助辞 -tara は、tabe-ru「食べる」のような母音語幹動詞（Ⅱグループ）であれば語幹にそのまま結びつき、kas-u「貸す」のような子音語幹動詞（Ⅰグループ）であれば結合要素 i を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である -kat を介して語尾助辞 -tara に結びつく。

### 3.6. 逆接形（クタッテ形）

逆接形（クタッテ形）は、語幹にクタッテ kutatte をつける。

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| (16) 赤クタッテ aka-kutatte | 丸クタッテ maru-kutatte |
| うれしクタッテ uresi-kutatte  | 熱クタッテ atu-kutatte  |
| 痛クタッテ ita-kutatte      | 寒クタッテ samu-kutatte |

クタッテ kutatte のク -ku も、中止形の -ku と同じ、逆接をつくるタッテ tatte を接合させるために出現する結合要素である。逆接形をつくる語尾助辞 -tatte は、tabe-ru「食べる」のような母音語幹動詞（Ⅱグループ）であれば語幹にそのまま結びつき、kas-u「貸す」のような子音語幹動詞（Ⅰグループ）であれば結合要素 i を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である -ku を介して語尾助辞 -te に結びつく。

### 3.7. 例示形（カッタリ形）

例示形（カッタリ形）は、語幹にカッタリ kattari をつける。

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| (17) 赤カッタリ aka-kattari | 丸カッタリ maru-kattari |
| うれしカッタリ uresi-kattari  | 熱カッタリ atu-kattari  |
| 痛カッタリ ita-kattari      | 寒カッタリ samu-kattari |

カッタリ kattari のカッ-kat は、過去形の -kat と同じ、例示形をつくるタリ tari を接合させるために出現する結合要素である。例示形をつくる語尾助辞 -tari は、tabe-ru「食べる」

のような母音語幹動詞（Ⅱグループ）であれば語幹にそのまま結びつき、kas-u「貸す」のような子音語幹動詞（Ⅰグループ）であれば結合要素 i を介して結びつく。イ形容詞は、イ形容詞特有の結合要素である -kat を介して語尾助辞 -tari に結びつく。

これまでみてきた過去形・前提形・例示形の結合要素 -kat、中止形・逆接形の結合要素 -ku、条件形の結合要素 -ker はイ形容詞に特有の結合要素である。これらは、次に文法形態素の本体が来ることのみならず、前にあるのは形容詞系の語幹であることを表しつつ、語幹と文法形態素を結びつける働きを担う。膠着、屈折という観点から<sup>6</sup>これら結合要素を見るなら、語尾形をつくる語尾助辞はそれぞれ3つのバリエーションを持ち、（例えば、過去形をつくる語尾助辞には、-ita、-ta、-katta の3バリエーションを持ち）、1つは動詞子音語幹（例えば、先の過去形なら、-ita:kas-ita）、1つは動詞母音語幹（-ta:tabe-ta）、1つはイ形容詞語幹（-katta:samu-katta）を選ぶと解釈できることになる。つまり、1つの文法的意味を持つ形態素が複数あり、それが、動詞（と形容詞）の語幹を選択するという屈折的現象である。形容詞にもみられる結合要素こそ屈折性の表れということになる。

### 3.8. 汎用形（連用形・ク形）

汎用形（連用形・ク形）は、語幹にク -ku をつける。

- (18) 赤ク aka-ku φ      丸ク maru-ku φ      うれしク uresi-ku φ  
熱ク atu-ku φ      痛ク ita-ku φ      寒ク samu-ku φ

本稿では、なにもつかないといったあり方の助辞を認める。tabe-「食べ」のような母音語幹動詞の汎用形（連用形）にみられる助辞は、なにもつかないといったあり方の助辞、つまり -φ（ゼロ）tabe-φ とった語尾助辞がつけられると考える。この -φ（ゼロ）を汎用形（連用形）形成のための助辞本体であると考ええる。kas-u「貸す」のような子音語幹動詞では、kas-i φ となり、語幹に -i φ をつけ形成され、-i は子音語幹に語尾の本体 φ を結びつける役をはたす結合母音と考える。もし、動詞とイ形容詞が汎用形（連用形）形成に当り、共通する語尾を持つと考えるなら、この -ku は、理論的には、語尾 -φ（ゼロ）をイ形容詞の語幹に接合させるために出現する結合要素とせざるを得ない。汎用形の意味・用法については5. で詳しくみる。

## 4. イ形容詞のカロウ形

先に示した語尾変化の表には表示しなかったが、イ形容詞には、動詞のヨウ形<sup>7</sup>にかたちの上で対応する「寒カロウ」samu-karoo、「赤カロウ」aka-karoo といった形態があるにはある。

これらは語幹に -karoo を接合させてつくられる。カロウの -kar は、イ形容詞の語幹に

-oo を接合させるために出現する結合要素であり、-oo は動詞のヨウ形を形成する語尾本体（例：降ろう hur-oo、食べよう tabe-y<sup>8</sup>oo）と共通する。ただし、語尾本体が同じであっても、語幹が形容詞であるため、-oo は、意志・勧誘の意味とはなり得ず、つくり得るとしたら推量の意味だけとなる。

(19) 今、札幌は寒かろう。

(20) 今、札幌は寒いだろう。昨日、札幌は寒かっただろう。

(19) の例から感じられる通り、現代語ではあまり用いられず、用いられたとしたら古めかしい文体の文においてのみである。イ形容詞のカロウ形はすたれてゆくかたちであり、推量の意味は専ら、(20) のように非過去形・過去形に文尾助辞である「ダロウ」を後続させて示すのが、現在の主たる傾向である（よって語尾変化表には敢てのせないことにする）。

この場合の形容詞のカロウ形の推量的意味は、動詞のヨウ形と同じで、「ダロウ」に近似する。具体的には、事態（この場合は状態）の成立を思考や想像で捉えたものとして表すといった推量的意味と考えられる。実際の使用としても、想像で捉えたことを表す副詞「さぞ」と共起する例（「さぞ寒かろう。さぞ暑かろう」）が多くみられ、このことからカロウ形が上記のような推量的意味を持つことがうかがえる。また、動詞のヨウ形と同じく、事態の成立を、存在している徴候や証拠から引き出したことを表す「らしい」が用いられる (21) のような文脈では、動詞ヨウ形と同様カロウ形の使用は不自然となる。このことから、形容詞のカロウ形と動詞ヨウ形が同じ推量的意味を表すと考えられる。

(21) 窓ガラスに霜がついてる。どうやら外は？寒かろう／寒いらしい。

## 5. イ形容詞「汎用形」(連用形) の意味・用法

動詞の汎用形(連用形)と対応するイ形容詞の汎用形(連用形)の主たる用法の第1は、中止形と競合して、なかどめとして用いられることである。

(22) 山は高く、険しい。(山は高くて 険しい)

(23) 道が狭く、歩きにくい。(道が狭くて 歩きにくい)

汎用形(連用形)中止形(クテ形)のどちらも(22)のような並列、(23)の因果の用法をもつ。ただし、因果については(24)のように中止形(クテ形)に比べ汎用形(連用形)は古めかしく感じられる。

(24) あの店の料理は?? まずく／まずくて、食べたもんじゃない。<sup>9</sup>

第2は「代行結合」<sup>10</sup>を形成する用法である。「代行結合」とは、動詞では「書キハスル」(kak-i  $\phi$  wa su-ru) のような汎用形（連用形）にスルを結合させた形である。形容詞の「代行結合」は（25）のような形をとる。

（25）寒くはある samu-ku  $\phi$  wa ar-u 赤くはある aka-ku  $\phi$  wa ar-u

動詞と異なるのは、動詞では、補助動詞がスルであるのに対し、形容詞ではアルが用いられること、及び、動詞では必ずとりたて助詞が入れ込まれるのに対し、形容詞では（26）のようにその義務性がややゆるくなることである。

（26）寒くあっても、景色は美しい。

アルは動詞であるため、よびかけのかたちを形成し、意志や命令を表すことができる。この結合は形容詞にはないかたちをつくりだす。

（27）美しくあれ utukusi-ku  $\phi$  ar-e、美しくあろう utukusi-ku  $\phi$  ar-oo

イ形容詞の汎用形（連用形）には、動詞には対応する用法がみとめられないものがある。それは、（28）のような変化（転化）の結果生ずる状態を表わす用法である。これが第3の用法である。この汎用形（連用形）は、（29）のような転化を示す自動詞・他動詞の必須の補語として出現し、名詞＋ニに対応し、名詞の「語形」にパラレルを持つものである。

（28）色が赤くなる。色を赤くする。

（29）息子が技師になった。息子を技師にした。

もし、このイ形容詞のかたち（例：aka-ku  $\phi$ 、samu-ku  $\phi$ ）が汎用形（連用形）であるとするなら、それに対応する名詞＋ニのニは、格助辞の「ニ」ではなく、述語化詞<sup>11</sup>ダの汎用形（連用形）と考えなければならない。

## 6. イ形容詞の連体接続形（連体形）

イ形容詞の非過去形と過去形も、動詞と同じく、そのままのかたちで名詞に結びつき、それを修飾することができる。非過去形と同形のものがイ連体形、過去形と同じものがカット連体形である。

(30) とても面白い話。とても面白かった話。

3. 1. や 3. 2. で確認したように、イ形容詞の連体形の 2 つの語形の対立は、動詞のそれとは異なり、【順序】といった文法的意味の表し分けをしているわけではない。

(30) のイ連体形の場合であれば、被修飾名詞の「話」に「面白い」といった属性を付与し、どのような「話」であるか限定している。ただ、この場合「話」がそのような属性をもつといった事態が成り立つのは発話時に限られることなく、またそのような事態の成立は特定の時間位置に位置づけられるものでもない。またカット連体形の場合も、イ連体形の場合と同様「話」に「面白い」とった属性を付与し、どのような「話」であるか限定している。この場合も当該の事態の成立が特定の時間（過去の時間帯）に位置づけ限定されることはない。ただ仁田（2016a）が述べるように「タ形は、イ形に比して、何らかの点で過去に関わる、というテンス性を帯びてくる（p.241）」ため、「属性は過去の時間帯に限定された存在ではないものの、そのような属性に対する認識・発見が過去にあった（p.241）」ということを表すことがある。また「当時赤かったこの靴が父のお気に入りだった」など過去の時間帯という時間限定性をもった時の成分（当時）があると「具有している属性に変更が生じた（p.241）」という読みが出てくる。<sup>12</sup>しかし、いずれにしても動詞の連体形と異なり、イ形容詞の連体形は【順序】といった文法的意味を表し分けることはない。

否定のかたちも、否定の非過去形、過去形と同じかたちで、連体形として働く。

(31) 全く面白くない話し。全く面白くなかった話し。

この場合も 2 つの語形の対立は【順序】といった文法的意味を表し分けてはいない。あくまで「話」に「面白くない」といった属性を付与し、どのような「話」を限定しているのみである。ただ、タ形になるとイ形と同様属性の認識時の過去性を表したり、属性の変更が生じたことを表したりすることはある。

かたちの上から見れば、連体形の否定のかたちは、補助形容詞ナイ（8. 参照のこと）の非過去形と過去形が連体形になって、名詞を修飾し、それにイ形容詞が「汎用形」（連用形）に立って、前接しているに過ぎない。動詞と対比してその様子を図示すると図 1 のようになる。

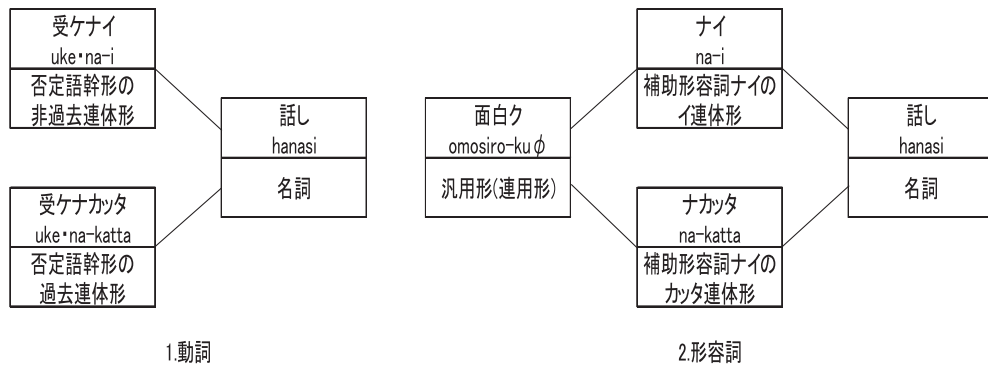


図1 動詞とイ形容詞の否定のかたちでの連体修飾

## 7. イ形容詞の副詞形

イ形容詞には動詞にない、特別のかたちがある。(32) (33) のような動詞・形容詞・副詞を修飾するかたちである。

(32) キャベツをかるくいためます。

(33) 川は早く流れていた。

(34) 軽イ karu-i - 軽ク karu-ku

薄イ usu-i - 薄ク usu-ku

早イ haya-i - 早ク haya-ku

上記のような語形を「副詞形」と呼ぶ。(35) の「早く」ようなイ形容詞の副詞形と (36) の「直ちに」のような本来副詞とされる語とは、修飾のしかたに特に差はない。

(35) 早く起きる (早イという形容詞の副詞形)。

(36) 直ちに起きる (直ちには通常副詞に分類される語)。

共に動詞に包み込まれるようなかたちで修飾を行う。イ形容詞は、語義をそのまま保存しつつ、このかたちで、副詞に転化するといい。

### 7.1. イ形容詞の副詞形と「汎用形」(連用形)の区別

イ形容詞の副詞形と汎用形(連用形)は、外容は全く同じである。しかし、示される内容(意味・機能)が異なるので区別する必要がある。

5. で確認した以下のような変化(転化する)を示す構文において、形容詞は転化の結果出現する状態を表す。

(37) 色が赤くなる。色を赤くする。 = (28)

(38) 色が赤くかわる。色を赤くかえる。

上例の赤クはカワル／カエル、ナル／スルという動詞の示す転化の意味を受け、転化の結果出現する状態を表わしている。これは動詞の支配に応じて文中に現れる必須の補充成分(必須補語)であり、動詞の表す動作の様子、様態を表す任意の要素である修飾語ではない。このかたちは、汎用形(連用形)と考えられて、副詞形と区別される。<sup>13</sup>

(39) 花子は美しく舞う。

(40) 花子はいつも着物を美しく着こなす。

美シク舞ウ、美シク着コナスという結びつきにおいて、美シクは副詞として動詞舞ウが表わす、動作の遂行に伴われる様子を修飾する(動作の様態を表す)。この修飾において、舞ウ様子が美しいのである。一方、美シク着コナスは着コナシタ結果を表わす意味がある。これは転化の結果表われた状態を示す意味である。こちらの意味において美シクは「汎用形」(形連用)と考えられる。美シクが副詞形であるのか、「汎用形」(連用形)であるのかによって説明される。

## 8. イ形容詞の否定のかたち

最後にイ形容詞の否定のかたちに触れておく。イ形容詞の否定は、イ形容詞を「汎用形」(連用形)に立て、ナイ na-i を後続させることで表わされる。

(41) 赤ク aka-ku φ・na-i    丸ク maru-ku φ・na-i    うれシク uresi-ku φ・na-i  
熱ク atu-ku φ・na-i    痛ク ita-ku φ・na-i    寒ク samu-ku φ・na-i

このナイ na-i は動詞のナイ・ana-i/・na-i (書かない kak・ana-i、食べない tabe・na-i) とは異なる。動詞のナイは語幹助辞<sup>14</sup>であり、語幹の一部となるが、このナイは1個のイ形容詞である。動詞ではナイがついたかたちは1語であるが、イ形容詞ではナイが後続するかたちは2語となる。その証拠に、(42)のように「汎用形」(連用形)とナイの間にとりたて助詞を入れ込むことができるが、(43)のように動詞のナイ・ana-i/・na-iの前にはとりたて助詞を置くことはできない。<sup>15</sup>

(42) 美シクハナイ (utukusi-ku φ wa・na-i)

寒クハナイ (samuku φ wa・na-i)

(43) \*書かはない \*書きはない (kak-i φ wa ·na-i)

\*食べはない (tabe- φ wa ·na-i)

このナイはイ形容詞の語形変化に応じて、さまざまなかたちをつくることができる。

- (44) 寒クナイ (samuku φ na-i)、寒クナカッタ (samuku φ na-katta)、  
寒クナカロウ (samuku φ na-karoo)、寒クナクテ (samuku φ na-kute)、  
寒クナケレバ (samuku φ na-kereba)、  
寒クナカッタラ (samuku φ na-kattra)、  
寒クナクタッテ (samuku φ na-kutatte)、  
寒クナカッタリ (samuku φ na-kattari)、寒クナク (samuku φ na-ku)

このナイは、形容詞の否定のかたちをつくるがゆえに補助形容詞の名に値する。動詞のナイとイ形容詞の否定のかたちの構造上の差異については別稿で扱う。

## 9. まとめ

これまで、形態的特徴からみた形容詞の種類を確認し、その中でも特にイ形容詞について、単語として文中でとる語形、そのつくりかた、意味・用法について検討してきた。

イ形容詞は、動詞と同様に、文の中での働き（文の終わりに使われるか、文の途中で使われるか）によりに「完結形（単独で完結している語形）」、「接続形（続ける語形）」、「汎用形（特定の用法をもたない語形）」の3つに大別された。

「完結形」は、動詞の呼び掛け形に対応する形態は存在するものの呼びかけ形は存在せず、1) 叙述形のみが確認され、テンス的意味の対立により、①非過去形、②過去形に分けられた。

「接続形」は、動詞と同様に、後続する品詞の異なりにより、2) 連体接続形と3) 連用接続形とに分けられた。ただ、2) については、動詞と同様に、非過去形と過去形がそのままのかたち（非過去形と同形のものが③イ連体形、過去形と同形のものが④カッタ連体形）で名詞に結びつき、それを修飾することができるが、その語形の異なりが動詞で見られた順序といった意味の表し分けをしているわけではないことを確認した。3) については、文中での働き（統合的 syntagmatic な意味・機能）により、動詞と同様に、⑤中止形、⑥条件形、⑦前提形、⑧逆接形、⑨例示形が認められた。さらに、汎用形（連用形）と外容は全く同じであるが、示される内容（意味・機能）が異なる⑩副詞形が存在することを確認し、両者の異なりを検討した。

「汎用形」には、なかどめ、代行結合、動詞の必須補語として変化の結果を表す、3つの用法を確認した。

形容詞の語形（語尾変化による語のかたち）については、①～⑩に、原形である⑪汎用形



(連用形)を加えた11種がみとめられ、それぞれ語尾助辞、結合要素、などについてもみてきた。また、否定のかたちについても確認し、形容詞の否定のかたちをつくるナイが動詞のナイとは異なり、補助形容詞ともいえる存在であることを述べた。最後に、イ形容詞の語尾変化(肯定のかたち)について表にまとめておく

## 10. 参考文献

- 荒正 子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』むぎ書房
- 小矢野哲夫(2014)「形容詞(形容名詞, ナ形容詞, 状名詞)」『日本語文法事典』大修館書店
- 城田 俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(1986)「形容詞のテンスについて」宮地裕(編)『論集日本語研究(一)』明治書院
- 高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 中崎崇・城田俊(2017a)「日本語における語の構成をめぐる－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第11号、pp.1-13、就実表現文化学会
- 中崎崇・城田俊(2017b)「日本語における語の認定と品詞分類をめぐる－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第46号、pp.63-76、就実大学就実短期大学
- 中崎崇・城田俊(2018a)「日本語における動詞のヨウ形・汎用形(連用形)・連体形の意味用法をめぐる－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第12号、pp.62-45、就実表現文化学会
- 中崎崇・城田俊(2018b)「日本語における動詞の語形とその作り方をめぐる－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第47号、pp.39-55、就実大学就実短期大学
- 仁田義雄(2016a)「形容詞文についての覚え書」『文と事態類型を中心に』くろしお出版
- 仁田義雄(2016b)「名詞文についての覚え書」『文と事態類型を中心に』くろしお出版
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類－状態形容詞と質形容詞－」『ことばの科学7』むぎ書房
- 八亀裕美(2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15、pp.13-40、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 渡辺 実(1971)『国語構文論』塙書房

語幹	Ⅰ 言い切るかたち(完結形)		Ⅱ 接続するかたち(接続形)										Ⅲ 不特定なかたち			
	1. 叙述するかたち(叙述形)		2. 名詞に接続するかたち (連体接続形)		3. 名詞以外に接続するかたち(連用接続形)										(原形)	
	①非過去形 (辞書形、イ形)	②過去形 (カッタ形)	③イ連体形	④カッタ連体形	⑤中止形 (クテ形)	⑥条件形 (ケレバ形)	⑦前提形 (カッタラ形)	⑧逆接形 (クタツテ形)	⑨例示形 (カッタリ形)	⑩副詞形	⑪汎用形(連用形)	(ク形)				
aka-	赤い	赤かった	赤い	赤かった	赤くて	赤ければ	赤かったら	赤くたって	赤かったり	赤く	赤く	赤く				
	aka-i	aka-katta	aka-i	aka-katta	aka-kute	aka-kereba	aka-kattara	aka-kutatte	aka-kattari	aka-ku	aka-ku	aka-ku φ				
maru-	丸い	丸かった	丸い	丸かった	丸くて	丸ければ	丸かったら	丸くたって	丸かったり	丸く	丸く	丸く				
	maru-i	maru-katta	maru-i	maru-katta	maru-kute	maru-kereba	maru-kattara	maru-kutatte	maru-kattari	maru-ku	maru-ku	maru-ku φ				
uresi-	うれしい	うれしかった	うれしい	うれしかった	うれしくて	うれしければ	うれしかったら	うれしくたって	うれしかったり	うれしく	うれしく	うれしく				
	uresi-i	uresi-katta	uresi-i	uresi-katta	uresi-kute	uresi-kereba	uresi-kattara	uresi-kutatte	uresi-kattari	uresi-ku	uresi-ku	uresi-ku φ				
ita-	痛い	痛かった	痛い	痛かった	痛くて	痛ければ	痛かったら	痛くたって	痛かったり	痛く	痛く	痛く				
	ita-i	ita-katta	ita-i	ita-katta	ita-kute	ita-kereba	ita-kattara	ita-kutatte	ita-kattari	ita-ku	ita-ku	ita-ku φ				

<sup>1</sup> 本稿での日本語教育とは、日本語非母語話者に対する日本語教育に限らない。日本語母語話者に対する、いわゆる国語教育も含む。以後断らない限り、この意で日本語教育という用語を用いる。また日本語教師についても、非母語話者、母語話者に対する日本語教育を行うものといった意味で用いる。

<sup>2</sup> 仁田 (2016b) によると「属性」は「時間的限定を持たない、したがってモノの存在にあわせて永続的に続きうる可能性を持った、モノに存在する、モノの同質的なありようであり、他のモノから自らを区別し取り立てる、そのモノの有し帯びている特徴や質」であり、「状態」は「動きと異なって、発生・最中・終了という時間的展開過程を有していないものの、一時的な時間の中に出現・存在するモノのアリヨウである」としてゐる。本稿でもこの定義に基づいて「状態」「属性」といった用語を用いる。

<sup>3</sup> 「当時富士山は高かった」のような、過去の時間帯という時間的限定性を持った「当時」といった時の成分が共起した場合は、仁田 (2016a) は富士山が「具有している属性に変更が生じた」といった読みがでてくるとしている。

<sup>4</sup> 名詞に接続するかたちである「連体接続形」は、伝統的に (国文法や学校文法において) 「連体形」と呼ばれている。本稿においても今後もこの用語を踏襲する。

<sup>5</sup> 動詞「連体形」における【順序】については中崎・城田 (2018a) を参照のこと。

<sup>6</sup> 膠着、屈折については中崎・城田 (2017b) を参照のこと。

<sup>7</sup> 動詞ヨウ形については (2018a) を参照のこと。

<sup>8</sup> -yoo の y は母音語幹に語尾の本体 oo を結びつける役をはたす結合子音である。

<sup>9</sup> 中止形 (クテ形) による因果用法についてはやや不自然、不自然と判断する母語話者もいるようである。

<sup>10</sup> 「代行結合」については中崎・城田 (2018a) を参照のこと。

<sup>11</sup> 「述語化詞」については中崎 (2017b) を参照のこと。

<sup>12</sup> イ形容詞の連体形の2つの語形が【テンス】についてどのような意味の表し分けを行っているのか、いないのかといったことについては慎重に検討する必要がある。ここでは深く立ち入らないこととする。

<sup>13</sup> 動詞の汎用形 (連用形) は、複合語の語基となり、複合動詞を形成する。語基の中には「走り去る」のように、結合関係として後項動詞の動きの様態を表すものもあり、これは形容詞の副詞形とパラレルな関係にあるとも考えられる。ただ、汎用形による動作様態を表す用法は、[\*走り逃げる] [\*走り帰る] が示すように、形容詞の副詞形ほど生産性がなく、自由に動詞の動きの様態を表すことはない。述語動詞の動きの様態を表す場合、動詞は語尾形の中止形 (テ形) が用いられる。例: 走って逃げる。走って帰る。

<sup>14</sup> 語幹助辞とは、屈折要素 (助辞) の1種で、語幹に融接して新たな文法上の語幹を形成する助辞のことをさす。書カセル／タベサセル (kak·ase·ru/tabe·sase·ru) 書カレル／タベラレル (kak·are·ru/tabe·rare·ru) などにおける下線部が語幹助辞である。

<sup>15</sup> この場合、動詞「汎用形」(連用形)と補助動詞スルが結合した形(結合形・代行結合)である「書キハスル」(kak-i  $\phi$  wa su-ru)の補助動詞スルの否定語幹形シナイが用いられた「書キハシナイ」(kaki-i  $\phi$  wa si·na-i)が使用される。

